

第4章 成果と課題

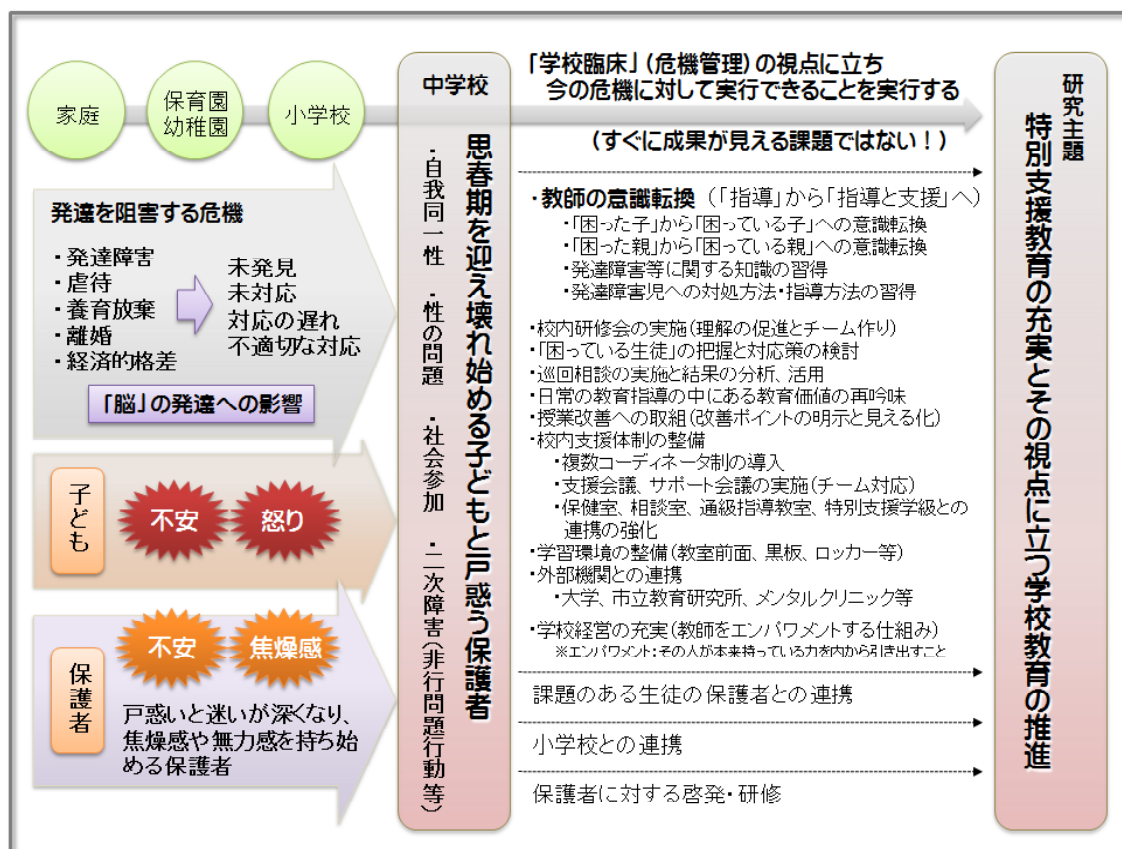
特別支援教育とその視点に立つ学校教育

1 研究の成果と残された課題

研究を振り返ると、発達課題を持った生徒の指導と支援は、「思春期を迎え壊れ始める子どもと戸惑う保護者」という現実の厳しさとの対峙であり、「学校臨床の視点に立ち、今の危機に対して実行できることを実行する」という姿勢で課題解決に全校で取り組んできた2年間であったと感じています。

本節では、2年間の研究を通して得ることができた成果と、なかなかうまくいかず解決することができなかった課題について述べ、研究のまとめとします。

4.1.1 研究の成果



本校は、研究委嘱を受けたこの2年間、「教師の意識転換」「校内研修の実施」「実態調査」「日常の教育活動の中にある価値の見直し」「授業改善と研究授業」「校内支援体制の整備」「学習環境の整備」「外部機関との連携」「支援会議(作戦会議)による保護者との連携」「学校経営の充実」など、「特別支援教育とその視点」に立ってさまざまなことに取り組んでき

ました。

研究を振り返ると、特別支援教育や発達障害に対する理解を深めることから始め、教師の意識を転換しながら、「今の危機に対して実行できることを実行する」という姿勢で苦闘してきた2年間ではなかったかと感じています。


研究をまとめるにあたって実施した「教員アンケート」には、次のような声が寄せられました。

これが私の意識改革！！ アンケートより

環境を整えると生徒の心が落ち着くような気がする。

短い指示。具体的な指示。複雑なことを簡単に。

提示装置の利用が定着し、視覚的な補助の大切さを知った。



深中スタンダード強化週間

プリントに番号を記して整理しやすく。ワークシートを工夫した。

見通しを持たせるために授業の流れやねらいを明確に示した。

□「深中スタンダード」の作成や強化週間を通して

- ・短い指示、具体的な指示を心がけたり、複雑なことをいかに簡単そうに教えるかを工夫するようになった
- ・研究を通して、環境を整えると生徒の心が落ち着くような気がする
- ・提示装置の利用が定着し、視覚的な補助の大切さを知った
- ・見通しを持たせるために、授業の流れやねらいを明確に示すようになった
- ・プリントに番号を記して整理しやすいように工夫し、ワークシートのどこに何を記入すればよいのかを工夫しながら授業を進めた

□「生徒の見方や接し方」に関して


- ・生徒の困り感を考えてみるようになった
- ・生徒の困り感に寄り添って考えてみようとするようになった
- ・生徒の行動の背後に「何かあるのかな？」と見方を変えるようになった
- ・大きな声をあげたり、頭ごなしに怒ることが減り、優しく声がけをしたり、まずは話を聞いてみるようになった

これが私の意識改革！！ アンケートより

生徒の困り感を考えてみるようになった。

生徒の良い面をみるようになってきた。

担任一人で悩むのではなくチームで対応。迅速な対応。



生徒の困り感に寄り添う支援

大きな声をあげたり、頭ごなしに怒鳴らなくなった。

優しい声がけ。まずは話を聞いてみる。

怠けやずるさではなくて「何かあるのかな？」と思うようになった。

- ・チームで対応することが基本であり、担任一人で悩まなくてもいいんだという思いが強く

なった

上記のような教職員の感想は、特別支援教育の視点に立ってさまざまな取組を行うことにより、教師の意識が徐々にではあっても変化し、その意識の変化が教師の発言や思いを変化させていることを示しています。

「学校臨床」という言葉を使わざるを得ない厳しい状況！

薬 臨床試験

その薬が有効か否かを実際に投薬などの治療を実施してみて、効果を判定するための医療行為

学校臨床学

「学校をめぐる様々な問題が生まれる過程の解明とその解決策の探究を、“臨床的”と言われる方法で(ものごとが起こっているありさまを遠くから眺めて頭の中だけで理屈を考えるのではなく、ものごとが起こっている現場にできるだけ近づき、入り込み、そこで起こっていることから丁寧に観察したり問題解決に具体的に関わったりしながら考えていく方法で)行おうとする新しい学問分野」

人間形成の「危機」ともいべき状況が広まり深まっている 「いらだち」「むかつき」「不安」「恐れ」に苛まれている子ども

【子ども理解】 田中孝彦著 2009.12岩波書店

第1章でも述べたように、生育環境の悪化が進んでおり、それに伴って発達障害や発達に課題を持つ生徒の数は確実に増えているように感じます。これからの学校は、「学校臨床」という考え方で教育を考えざるを得ない厳しい状況の中で、「次代を担う生徒の育成」が求められています。

社会や大人の崩壊が子どもたちの育ちを歪めているという「子ども崩壊」の時代において、改めて「子どもという生まれ出た命が育つプロセス」を教師も保護者もしっかりと学び、陥りやすいさまざまなトラブルや障害について知っておくことがこれからの教育においては必須であり、その確かな理解の上に立って「すべての子どもたちのために最適な生育環境（教育を含めて）をどう再構築するのか」を考えなければならない時代が訪れているのではないかとの認識が、研究の前提になっています。(第1章1-6より)

この研究の前提に十分に応えられる研究成果をあげ得たかは疑問ですが、研究を通して「発達障害」について知り、「生徒の困り感」を感じられるようになり、具体的な支援の第一歩を全教職員で踏み出せたことは確かです。

「生徒の困り感」を把握する手法を考え、具体的な支援方法を検討し、困っている生徒への支援会議を頻繁に開き、外部機関からの指導や支援を得ながら研究を進めることができました。

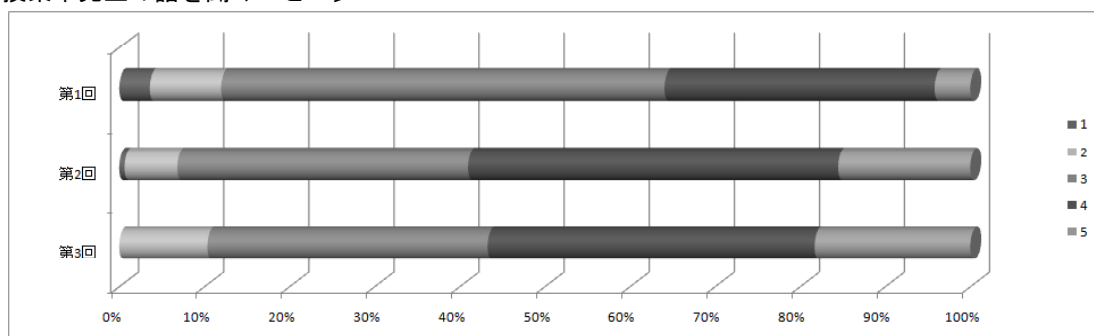
具体的には、

- ・深谷中学校独自の「教育支援プランB」の作成
- ・「発達課題のある生徒への指導心得」（危機管理上の問題としてのメンタルヘルスクエア）
- ・「深中スタンダード」の作成と学びの環境の整備（スケジュールボードの活用など）
- ・特別支援教育への理解の促進
- ・「強化週間」から生み出された、板書、ノート指導、発問・指示などに関する工夫
- ・「特別支援教育の視点に立った指導案の工夫」（形式の変更と記述内容の充実）
- ・「指導案スタンダード」の作成と活用
- ・「深谷中学校『授業』振り返りシート」の作成と活用
- ・「複数コーディネーター制」を軸とした校内支援体制の整備
- ・「チーム対応」を基盤とした支援会議（作戦会議）の編成と実施

- ・医療機関との積極的な連携（情報交換と指導助言の依頼）
 - ・発達検査に対する理解の向上と必要に応じた検査の実施
 - ・「巡回相談」を充実させるための工夫
 - ・「気になる生徒のつまづきチェック」シートの作成と活用
 - ・「気になる生徒のピックアップ」のためのチェック表の作成と活用
 - ・「生徒の困り感」を把握するための調査用紙の作成とアンケートの実施
- など、研究や校内研修を通してさまざまな事柄に取り組んできました。

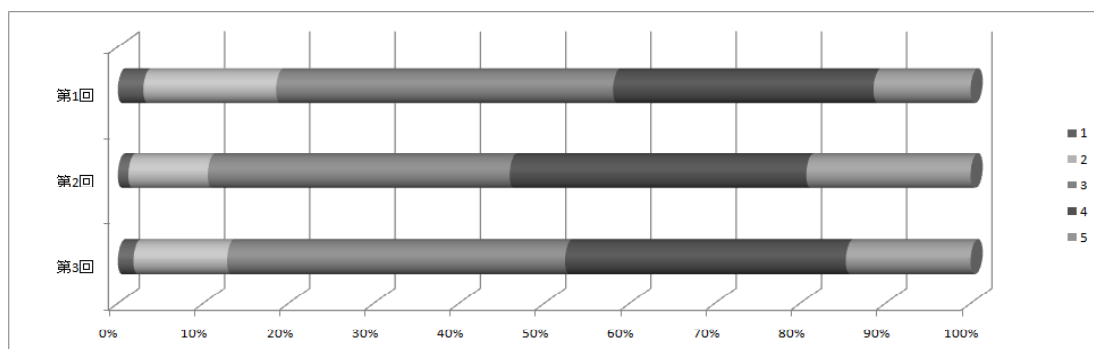
本校の研究は、具体的な数値で研究成果を示せるような内容ではありませんが、平成 21 年 9 月、平成 22 年 3 月、平成 22 年 7 月に生徒を対象に実施した「アンケート調査」の結果からは、僅かですが改善が見られています。

【授業中先生の話聞くこと？】



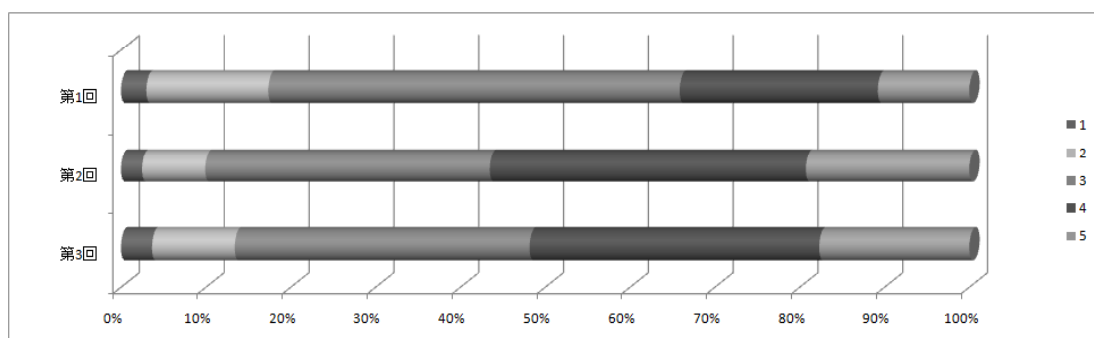
(1 : とても苦手 2 : ちょっと苦手 3 : ふつう 4 : まあまあ得意 5 : とても得意)

【教科書の文章を読むこと？】



(1 : とても苦手 2 : ちょっと苦手 3 : ふつう 4 : まあまあ得意 5 : とても得意)

【字を正しく書くこと？】



(1 : とても苦手 2 : ちょっと苦手 3 : ふつう 4 : まあまあ得意 5 : とても得意)

研究は、私たち教師の意識を変革し、日頃何気なく行っている教育実践の価値を見直す機会になりました。

また、授業改革に向けた第一歩を踏み出す切っ掛けを掴むことができ、私たち教師自身の支援をも含めた支援体制の重要性も教えてくれました。

「〇〇君は、些細なことでも『ダメ』と言われると、全否定されたような意識を持つ傾向にあります」「なるべく具体的に『〇〇がよかった』と褒めるようにしてください」

これは、本校の教員が相談に伺ったときの精神科の担当医師からの助言です。

このように発達課題を抱え、「これまでの指導が通じにくい生徒」が学校には想像以上に多数在籍しており、「特別支援教育は、もはや特別な教育ではない」という時代が始まっているのかもしれない。

その意味からも教師の意識改革がまず必要なのではないでしょうか。

意識改革

教師の意識が変わると、教師の発言や思いが変化する
 (「個」への視線と「集団」への視線)
「特別支援教育」は「特別なこと」ではない
 (日常、何気なくやっていること)

「心からのごめんなさいへ」(品川裕香著：中央法規出版 2005.7) という著書の中で、発達障害の子どもたちに対する指導について述べている法務教官のことばが記されています。その一部を紹介します。

「発達障害のことを勉強し始めて何が変わったのか」と尋ねたときのことだった。三十代前半の宇治少年院の寮主任をしているある法務教官が私の目をじっと見ながら、こんなことを言ったのである。

「勉強した結果、何が変わったって、自分が変わったんです。院生ももちろん変わったけれど、何より院生たちを理解する“新しい目”が自分のなかに生まれた、それが自分にとっていちばん画期的なことだった」

「こちらがしっかり勉強し、特性に応じた指導方法に変えたら、子どもたちは確実に変わっていくことがわかったんです。そうしたら、指導の方法もいろいろ浮かんできて、自分でもそれが嬉しかった」

本校の2年間の研究を通して、教師の意識は転換されつつあります。その意味では、研究の成果があったといえるのかもしれませんが。

しかし、まだまだ意識改革は不十分で、研究の成果が日々の教育実践で十分に活かされていないことが「残された課題」を生み出しているようにも思います。

成果

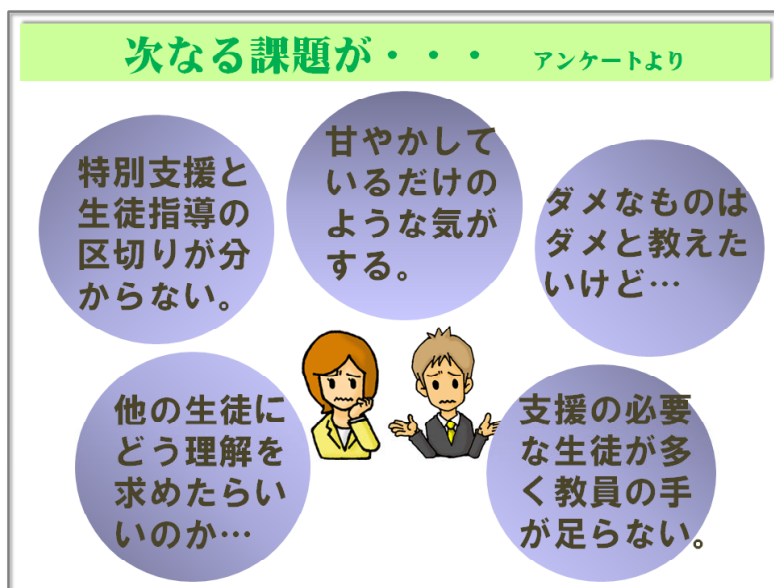
- **意識改革：生徒の困り感に寄り添う**
- **価値の見直し：**
「特別支援教育」は「特別なこと」ではなく、日頃何気なくやっている実践を意識してやってみることから始まる
- **授業改革：学びと行動の支援**
- **支援体制：迅速なチーム対応
外部機関との連携の強化**

4.1.2 残された課題

「発達課題を抱えた生徒の指導や特別支援教育の取組」は、すぐに成果が見えるような容易な研究課題ではありません。

そして、本校の研究は始まったばかりであり、取組が不十分で解決にいたっていない課題、実践に戸惑い迷っている課題の方が多なのが現状です。

「教員アンケート」には、次のような意見や疑問が寄せられました。



- ・ 怒る場面を減らし、まず話を聞いてみようとする努力しているが、「ダメなものはダメなんだ」と教えるべきではないか
- ・ ただ甘やかしているような気持ちになり、特別支援教育と生徒指導との区切りがつけられないし、どうしたらよいかかわからない
- ・ 発達課題や発達障害について、あるいは発達課題を抱え苦しんでいる生徒のことについて、周囲の生徒にどう理解を求めていくのか？
- ・ 支援を必要とする生徒が多すぎて、教員の手が足りない

など、特別支援教育を進めていく上で解決しなければならない課題は山積しています。

さまざまな手段を講じて、発達障害や発達課題を抱えた生徒の指導に苦闘している状況はなかなか改善されません。むしろ、発達課題のある生徒が集団の規律を乱し、健全な集団の力が削がれていく面もあります。

したがって、本校が、今後取り組まなければならない第一の課題は、「質の高い集団づくり」だと考えています。その基本は「学級集団づくり」です。発達課題のある生徒に対する周囲の生徒からの理解を得ながら「誰もが居心地のよいクラス」をどう創っていくのかは重要な課題です。

課題

- **学級集団づくり：**
周囲の生徒の理解
誰もが居心地のよいクラス
- **特別支援教育を基盤とした生徒指導の在り方：**
生徒支援委員会を中核とした生徒指導、教育相談、特別支援教育の連携の強化
- **小・中・高の連携**

また、特別支援教育の視点を基盤とした生徒指導の在り方を再検討することも必要です。生徒支援委員会を中核とした「生徒指導・教育相談・特別支援教育の連携」を一層強化していくことも考えなければなりません。

さらに、「子どもは連続して発達・成長する存在である」ことを考えれば、小学校・中学校・高等学校等の連携を深めることも重要です。

研究を通して、さまざまな事柄に取り組み、特別支援教育を推進する意味や価値を確認し、その進むべき方向は少し見えてきたように思いますが、研究をさらに進めるためには、本校がこれまで取り組み、2年間の研究で明らかにしてきた一つ一つの実践の成果と課題を、「特別支援教育の充実とその視点に立つ学校教育の推進」を実現するための端緒として位置付け、確実な教育実践へと変えていかなければなりません。

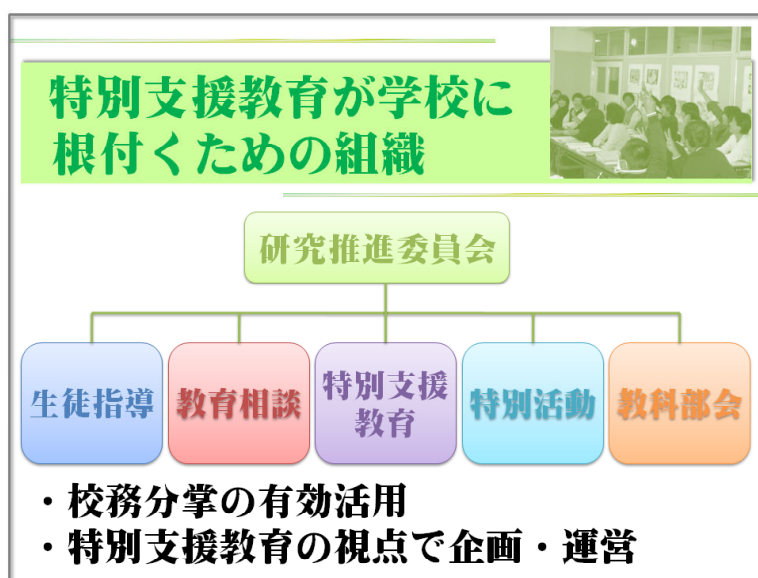
課題解決に向け、研究を継続することが重要ですし、特別支援教育が学校に根付くよう、工夫・改善が今後とも必要だと考えています。

研究の途中で組織を変更したのも、生徒指導・特別活動・教育相談など、既存の校務分掌や部会を有効に活かし、それぞれの校務分掌や部会が「特別教育の視点」に重点を置いて、工夫しながら企画・運営することが必要だからです。

発達障害の有無にかかわらず、日々の教育活動の中心に子どもたちを置き、私たち教職員が話し合い、語り合い、時には愚痴を言い合いながらも、すべての子どもの自立（自律）を助けられる教職員でありたいと願いながら、研究報告を終わりにします。

本校は、発達障害のある生徒への適切な対応をするための知識や手法を学び、現状の困難さを改善するために特別支援教育に関する研究や実践を展開しようとしたのではなく、発達障害等に関する知識や対処方法を学び、その視点に立って通常の学校でのこれからの教育のあり方を明らかにしていくことが研究に取り組む価値であると考え、これまで研究に取り組んできました。

そして、特別支援教育を学び、その視点に立った教育を推進することにより、特別支援教育に関する知識や手法が、教師としての基礎的な力量を高め、結果として、教科指導の専門家、教育の専門家としてこれからの教育を創造することができる骨太な教師を育成することができるのではないかと考えています。



(× モ)

